

青き鬼の霊木と、比叡山の水神たる酒天童子

WisdomMingle.com

倉田 幸暢

はじめに

本稿では、香取本『大江山絵詞』(以下、『大江山絵詞』と略記)の絵巻物に記されている、「酒天童子が変化した楠」を出発点として、それに関連する叡山開闢譚の霊木や、その守護者であった青鬼、そこからさらに、酒天童子の水神としての性質、などについて、お話ししたいとおもいます。(※本稿の最新版は、つぎの URL でご覧いただけます。
<https://wisdommingle.com/?p=26203>)

酒天童子の昔語りのなかの霊木説話

現在、逸翁美術館に所蔵されている『大江山絵詞』の絵巻物は、現存最古の酒呑童子説話をつたえています。その『大江山絵詞』のなかに、酒天童子が自らの来歴を語る場面があります。その場面では、古くから酒天童子が住みかとしていた「平野山」の土地(比良山地や比叡山地のあたりの地域)が、伝教大師最澄によって奪い取られてしまった、という話が語られています。

そのとき、その土地の先住者であった酒天童子は、最澄による侵略をはばむために、楠木(くすのき)の巨木に変化して抵抗しました。ですが、結局は、力及ばず、住みかを追い出されてしまいます。この下の文章は、『大江山絵詞』に記されている、その経緯についての、酒天童子による昔語りの一節です。

古はよな、平野山を重代の私領として罷り過ぎしを、伝教大師といひし不思議の房が此の山を点じ取りて、峰には根本中堂を建て、麓には七社の霊神を崇め奉らんとせられしを、年来の住所なれば、且は名残も惜しく覚え、且は栖もなかりし事の口惜しさに、楠木に変じて度々障碍をなし、妨げ侍りしかば、大師房、此の木を切り、地を平げて、「明けなば」と侍りし程に、其の夜の中に又、先よりも大なる楠木に変じて侍りしを、伝教房、不思議かなと思ひて、結界封じ給ひし上、「阿耨多羅三藐三菩提の仏達、我が立つ杣に冥加あらせ給へ」と申されしかば、心は猛く思へども力及ばず、現はれ出でて、〔後略〕

上記の話の要点は、かんたんに言えば、「比叡山の土地の所有権が、先住者であった酒天童子(鬼)から、最澄に移った」ということです。そして、比叡山の土地の所有権は、巨木(霊木)によって象徴されています。

上記の『大江山絵詞』に記されている話と、なんらかのつながりがあるとおもわれる説話(あるいは、上記の話のもとになったかもしれない説話)が、比叡山延暦寺についての文献のなかに、複数残されています(牧野, 1990, pp. 87-94)。比叡山延暦寺の総本堂である根本中堂の本尊は、薬師如来像です。それらの説話というのは、その薬師如来像をつくるときにつかわれた御衣木

(材木)となった霊木についての説話です。それらの説話の内容は、おおまかに言えば、上記の『大江山絵詞』の話とおなじような、「比叡山の土地の所有権が、先住者(鬼や、天龍八部、金剛力士、仙人など)から、最澄に移った」という内容です。そして、それらの説話においても、比叡山の土地の所有権は、霊木によって象徴されています。

比叡山の所有権移転の霊木説話が記載されている文献群

さきほどお話したような、「霊木に象徴される、比叡山の所有権移転の説話」は、下記に列挙した文献に記載されています。

- ・ 『法華経驚林拾葉鈔』ほけきょうじゆりんしゅうようしやう 卷第 24 陀羅尼品 第 26 だらにほん
- ・ 『日吉山王利生記』ひえさんのうりしやうき 第 1
- ・ 身延文庫蔵『法華直談私見聞』みのぶぶんこぞう ほつげじきだんしけんもん
- ・ 『溪嵐拾葉集』けいらんしゅうようしゅう 卷第 107 記録部 私苗 六
- ・ 『叡岳要記』上巻「虚空蔵尾本願堂縁起」
- ・ 『叡岳要記』下巻「最澄大師一生記」
- ・ 『山門堂舎記』(「根本中堂」の項目)
- ・ 『法華経直談鈔』(「廿三 山門三佛造事」)
- ・ 『山門堂社由緒記』(「本願堂」の項目)
- ・ 『比叡山堂舎僧坊記』(「佛母塚」の項目)
- ・ 『山門名所旧跡記』第 1 巻「東塔分」(「香炉岳(香炉ガ岳)」と「佛母塚」の項目)
- ・ 『山門名所旧跡記』第 1 巻「西塔分」(「登天峯」の項目)
- ・ 『面授口訣』(鎮国道場本仏 仁忠和尚八箇問答記云 第一)

また、上記の文献群に記載されている「霊木に象徴される、比叡山の所有権移転の説話」の原型のひとつである可能性がある説話として、聖徳太子についての下記の文献に記載されている説話があります。その説話は、霊木こそ登場しないものの、「かつて、聖徳太子が生きていた時代に、比叡山に悪鬼がいた」という内容になっています。

- ・ 醍醐寺蔵『聖徳太子伝記』だいごじぞう しょうとくたいしでんき (「太子卅二歳御時」)

また、『大江山絵詞』の酒天童子の昔語りにあつた霊木説話は、比叡山延暦寺のはじまり(つまり、日本天台宗のはじまり)を物語る「開闢譚」かいびやくたんでもあります。その「叡山開闢譚」えいざんかいびやくたんの主題のひとつは、「開祖である高僧が、霊山で悪しきものにはばまれながらも、それに打ち勝つ」という部分です。その主題は、もとをたどれば、「華頂降魔」かちょうごうまの説話の主題をまねしたものであるようです。

比叡山延暦寺を総本山とする日本天台宗は、その開祖である最澄が、(中国の)天台宗の教えを継承して開いた宗派です。「華頂降魔」の説話というのは、その(中国の)天台宗の開祖である智顛にまつわる説話です。その「華頂降魔」の説話の主題もまた、『大江山絵詞』の酒天童子の霊木説話とおなじように、「開祖である高僧が、霊山で悪しきものにはばまれながらも、それに打ち勝つ」という内容になっています。その「華頂降魔」の説話は、下記の文献に記載されています。(「智者大師」というのは、智顛の尊称です。)

- ・ 『隋天台智者大師別傳』

ここからは、上記で紹介した文献群のなかでも、『大江山絵詞』の酒天童子の霊木説話の成立に、とくに大きな影響をあたえた可能性や、ふかいつながりがある可能性があるとおもわれる文献と、そこに記載されている説話を、いくつかとりあげてみたいとおもいます。

『法華経鷲林拾葉鈔』の、鬼の霊木の説話

さきほど紹介した、「霊木に象徴される、比叡山の所有権移転の説話」が記載されている文献群なかでも、『大江山絵詞』の酒天童子の霊木説話の内容との共通点がとくに多いのは、『法華経鷲林拾葉鈔』巻第 24 のなかの、「陀羅尼品 第 26」の節のなかにある説話です。(この文献の成立年代は、1512 年ごろ(室町時代後期)です。)

この文献のなかの、「霊木に象徴される、比叡山の所有権移転の説話」の部分には、おおよそ、つぎのようなことが記されています(『日本大蔵経 第 26 巻』, p. 242)。(下記の文章のなかの、〔 〕(亀甲括弧)内の言葉は、筆者による注記です。)

叡峰〔比叡山〕開白〔開闢〕の時、根本中堂の薬師〔薬師如来像〕を造り奉らんとて、御杣木を尋ね玉ふに、東北に当たって楠あり。彼の木より光明を放つ。大師〔伝教大師最澄〕危しく思召し、彼の木の木へ尋ね行きて見玉ふに、二人の鬼有りて、此の木を守護す。時に大師詠じて云く、「阿耨多羅三藐三菩提の仏達、我が立つ杣に冥加あらせ玉へ」。鬼の云く、「我、狗留孫仏〔過去七仏の第四番目の仏〕より以来、此の木を守護し、釈尊像法の時に当たり、此の山〔比叡山〕に於いて大乘弘通の入師来る可し。即ち与ふ可し」と云へり。「汝が事なるべし」と云ふに、速やかに東北を指して去りにけり。即ち此の木を切りて、一刀三札に薬師如来の像を造り、根本中堂の本尊と為す。其の札文に云ふ。像法転ずる時、衆生を利益す、故に薬師瑠璃光仏と称号す。此の如く唱いて礼拝し玉ひしかば、木像の薬師、新たにうなづき給ひけり。今も夜など道を行くに、をそろしき事之有り。此の歌を三反誦するに、鬼神障礙を成さずと云ふ也。

この文献の上記の説話と、『大江山絵詞』の酒天童子の霊木説話には、つぎのような共通点があります。

- ・ 比叡山の先住者として、鬼が登場する(「二人の鬼」と、酒天童子)。
- ・ 最澄が、主要な人物として登場する。
- ・ 霊木の樹種は、楠。
- ・ 最澄がつくったとされている、つぎの和歌が記載されている。「阿耨多羅 三藐三菩提の仏たち わが立つ 杣に 冥加 あらせたまえ」。

こうした共通点があることから、『法華経鷲林拾葉鈔』と、『大江山絵詞』の、双方に記載されている「比叡山の鬼の霊木の説話」には、なんらかのつながりが、あるのではないかとおもいます(あるいは、片方が、もう片方の説話の原型のひとつになったのかもしれませんが)。

『日吉山王利生記』の、青鬼の霊木の説話

『日吉山王利生記』第 1 に記載されている説話も、「霊木に象徴される、比叡山の所有権移転の説話」の文献群なかで、『大江山絵詞』の酒天童子の霊木説話の内容との共通点がある説話です。(この文献の成立年代は、鎌倉時代後期とされています(鎌倉時代は、1185 年ごろ～1333 年)。)

この文献のなかの、「霊木に象徴される、比叡山の所有権移転の説話」の部分には、おおよそ、つぎのようなことが記されています(『神道大系 神社編 29』, p. 650)(『続群書類従 第 2 輯 下 3 版』, pp. 655-656)(『日本精神文化大系 第 4 巻』, p. 130)。(下記の文章のなかの、〔 〕(亀甲括弧)内の言葉は、筆者による注記です。)

桓武天皇御宇延暦四年に伝教大師御年十九にて、始て叡山によぢのぼり給しに、倒たる枯木を見守る青鬼あり。大師問給はく、「汝何者ぞ」。鬼答申云、「未来に聖人来て仏像を彫刻すべし。其柞木のために不可踏守」と。「地主権現の仰によりて、此木の二葉より之を守護す」云々。大師感涙甚し。艸庵をむすび願文を製し、同七年に一乗止観院を立給。其間彼霊木にて薬師如来を造像す。一たび斧をくだして三度礼拝し、斧をおろす度ごとに、未来悪世の衆生必利益し給べきよし誓約ありければ、仏像うなずき給ける。大師三仏を一院にきざむとは、此根本中堂〔比叡山延暦寺の総本堂〕薬師〔薬師如来像〕、転法輪堂〔比叡山延暦寺の西塔地区の本堂である釈迦堂〕釈迦〔釈迦如来像〕、浄土院〔最澄の廟所〕のとなりにある堂宇〔阿弥陀〔阿弥陀如来像〕なり。凡桓武天皇は観自在尊〔

観自在菩薩尊] 応化。伝教大師は薬王菩薩の垂迹、智者大師[天台宗の開祖である智顛]の後身[生まれ変わり]なり。

この文献の上記の説話と、『大江山絵詞』の酒天童子の霊木説話には、つぎのような共通点があります。

- ・ 比叡山の先住者として、鬼が登場する(「青鬼」と、酒天童子)。
- ・ 最澄が、主要な人物として登場する。

こうした共通点があることから、『白吉山王利生記』と、『大江山絵詞』の、双方に記載されている「比叡山の鬼の霊木の説話」には、なんらかのつながりが、あるのではないかとおもいます(あるいは、片方が、もう片方の説話の原型のひとつになったのかもしれませんが)。

身延文庫蔵『法華直談私見聞』の、青鬼の霊木の説話

身延文庫蔵『法華直談私見聞』に記載されている説話も、「霊木に象徴される、比叡山の所有権移転の説話」の文献群なかで、『大江山絵詞』の酒天童子の霊木説話の内容との共通点がある説話です。(この文献の成立年代は、1471年ごろ(室町時代後期)です。)

この文献のなかの、「霊木に象徴される、比叡山の所有権移転の説話」の部分には、おおよそ、つぎのようなことが記されています(牧野, 1990, p. 90)。(下記の文章のなかの、〔 〕(亀甲括弧)内の言葉は、筆者による注記です。「■」の記号は、文献のなかの欠損部分をあらわしています。)

一、根本中堂本尊薬師の事。伝教大師[最澄]我山[比叡山]に登り、作仏の爲に御尊木を尋ね玉へり。■時、松尾の明神虚空に現れ、前の尾[山裾]に御尊木有りと告玉へり。後に行見玉へは、此木を青色の二の鬼守護して居り、大師此の木を乞玉へは、二鬼問て云く、「御名をは何と申」と云り。大師、「我は大安寺の沙門行表和尚の御弟子に最澄法師[最澄法師]と云者也」と答玉ふ。其時に二鬼申けるは、「是は過去狗留孫仏[過去七仏の第四番目の仏]より、『最澄法師[最澄法師]に渡申せ』とて預かり申して、今迄守護申て候木なり。渡し申さん」とて、虚空を指失せにけり、と云ふ[後略]

この文献の上記の説話と、『大江山絵詞』の酒天童子の霊木説話には、つぎのような共通点があります。

- ・ 比叡山の先住者として、鬼が登場する(「青色の二の鬼」と、酒天童子)。

- ・ 最澄が、主要な人物として登場する。

こうした共通点があることから、身延 文庫 蔵『法華直談私見聞』と、『大江山絵詞』の、双方に記載されている「比叡山の鬼の霊木の説話」には、なんらかのつながりが、あるのではないかとおもいます(あるいは、片方が、もう片方の説話の原型のひとつになったのかもしれませんが)。

醍醐寺蔵『聖徳太子伝記』の、比叡山の悪鬼の説話

醍醐寺 蔵『聖徳太子伝記』のなかの「太子卅二歳御時」の節に記載されている説話も、「比叡山の所有権移転の説話」の文献群なかで、『大江山絵詞』の酒天童子の霊木説話の内容との共通点がある説話です。(この文献の成立年代は、1460 年ごろ(室町時代中期)です。)

この説話は、霊木こそ登場しないものの、「かつて、聖徳太子が生きていた時代に、比叡山に悪鬼がいた」という内容になっています。また、この説話では、「聖徳太子が、死後に最澄に生まれ変わった」ということになっています。

この文献のなかの、「比叡山の所有権移転の説話」の部分には、おおよそ、つぎのようなことが記されています(『中世聖徳太子伝集成 第 2 巻』, pp. 451-453)。(下記の文章のなかの、〔 〕(亀甲括弧)内の言葉は、筆者による注記です。)

〔聖徳太子が〕初 楓野〔山城国 葛野郡 楓野〕行詣の時。今之都〔平安京〕の深山たりしを御覧じて、左右に 勅して、青龍口、吾れ〔聖徳太子〕此の地の形を相るに、北は 塞り、南は 晴て、東に清河 流て、福寿 増長之 兆を 示し、東西に長山 遙に 連て、千年の 翠り深くして、万民 撫育之 徳を 顕す。誠に 是れ、左 青龍、右 白虎、前 朱雀、後 玄武、四神 相應之 勝地也。吾れ 入滅 一百七十 餘年〔聖徳太子の死後約 170 年後の〕、人皇 五十代 之 帝の 時に 此の地に 於て、遷都 有る 可し。王法 長久、佛法 繁昌之 靈區也。之に 依り、應化の 諸神 先ず、居を 所々に 卜て、此の地を 守護する 也。彼の 北の山の 麓に 月神 垂迹して、百王の 寶祚を 守る、即ち 賀茂大明神也。同き 北山の 高岳に 龍神 止住して 王城の 靈地を 守護す、即ち 貴船大明神也。西山の 脚に 猛靈 鎮守 有り、即ち 松尾大明神也。其の 外の 諸神、稱て 計う 可からざる 也〔数え切れないほど多い〕。然りと 雖も、東北の方の 高嶽〔比叡山〕に 大勢力の 悪鬼 有り。時々 障尊を 作り、是の 大難を 為す 也。而も、彼の 嶽〔比叡山〕は、拘囚 孫佛 轉法輪之 古跡也〔過去七仏の 第四番目の 仏である 拘留孫佛が、かつて 説法を行つた場所である〕。法末之 時に 至て、悪鬼 押領して 住城を 為し、佛法之 大 障碍を 作り。應化の 諸神之 奈とも せず。故を 以て、此の地 未だ 王城と 成らざる 也。然りと 雖も、吾れ〔聖徳太子〕無比の 大願を 發して、入滅 一百七十 餘年 之後〔死後約 170 年後に〕、

へんど たくしやう げせん しゅじやう りやく しか のち か たかだけ ひえいざん おい
 邊土に託生して、下賤の衆生を利益し、然る後に、彼の高嶽〔比叡山〕に於
 て、鎮護国家の大伽藍を建て、一乗圓宗〔天台宗〕の教法を崇て、悪魔を千里に
 ばら ころき ばんげい 守し、ト誓玉ければ、小野大臣筆を執て之を記録する也
 。此の邊土託生の御願浪ず、身後一百七十余年に〔死後約170年後に〕、
 近江國志賀郡の住民百枝〔最澄の父親である三津首百枝〕が子に生て、聡穎
 無雙、十二歳にして、行表法師〔最澄の師匠〕に投じて出家して、法相宗の章疏
 を学し、并に天台三大部を自見す、十九歳にして、彼の叡嶽〔比叡山〕に上て、
 五種の大願を發し、柴の廬を結び、一乗止觀院〔後の根本中堂〕と名け、精修
 苦行して倦むこと無き也。桓武天皇之を尊て、檀契浅からず、茅茨を改て、
 梵宇を作し、延曆寺と号す。師の諱は最澄。後に傳教大師と諡す。太子の
 記文に、東北の方の高嶽と曰は、今の比叡山也。傳教は太子の後身〔生まれ
 変わり〕也。已上、松子傳也。

この『聖徳太子伝記』の説話と、『大江山絵詞』の酒天童子の靈木説話には、つぎのような共通点があります。

- ・ 比叡山の先住者として、鬼が登場する(「悪鬼」「悪魔」と、酒天童子)。
- ・ 最澄が、主要な人物として登場する。

こうした共通点があることから、醍醐寺蔵『聖徳太子伝記』と、『大江山絵詞』の、双方に記載されている「比叡山の鬼の説話」には、なんらかのつながりが、あるのではないかとおもいます(あるいは、片方が、もう片方の説話の原型のひとつになったのかもしれませんが)。

『隋天台智者大師別傳』の、「華頂降魔」の説話

さきほどお話したように、『隋天台智者大師別傳』に記載されている「華頂降魔」の説話と、『大江山絵詞』の酒天童子の靈木説話は、どちらも、「開祖である高僧が、靈山で悪しきものにはばまれながらも、それに打ち勝つ」という内容になっている、という共通点があります。

そのような共通点がある理由は、おそらく、日本天台宗の教団が、「叡山開闢譚」をつくるにあたって、自分たちの宗派の源流である(中国の)天台宗の「天台山開闢譚」の内容に似せることによって、自分たちの正統性の主張と、権威付けをおこなおうとしたからではないかとおもいます。

『大江山絵詞』の酒天童子の靈木説話のほうのあらすじは、「日本天台宗の開祖である最澄が、酒天童子が変化した楠の巨木にはばまれながらも、それを打ち破って、比叡山延曆寺を創始した」というような内容になっています。

一方、『隋天台智者大師別傳』に記載されている「華頂降魔」の説話のあらすじは、「(中国の)

天台宗の開祖である智者大師(智顛)が、天台山で修行していたときに、暴風や雷鳴をともなってあらわれた、たくさんの化け物たちによって、修行を妨害されながらも、それらに屈せず、悟りを開いて、天台宗を創始した」というような内容になっています。

『隋天台智者大師別傳』のなかの「華頂降魔」の部分には、おおよそ、つぎのようなことが記されています(『国訳一切経 和漢撰述 第78』, pp. 599-600)(『新纂大日本統蔵経 第77巻』, pp. 665-666)(『伝教大師全集 第四』, pp. 182-183)。(この文献は、6世紀後半～7世紀前半ごろの隋(中国)で成立しました(日本は奈良時代ごろ)。下記の文章のなかの、〔 〕(亀甲括弧)内の言葉は、筆者による注記です。)

寺の北の別峯を、呼で華頂と為す。登りて眺るに群山を見ず。暄涼にして、永く余処に異なる。先師〔智者大師(智顛)、衆を捨て、ひとり往きて頭陀す〔修行する〕。忽ちに、後夜に於て大風木を抜き、雷震いて、山を動かす。魍魅千群〔たくさんの鬼や化け物〕、一形百状あり。或は頭に龍鬚を戴き、或は口より星火を出す。形は黒雲の如く、声は霹靂の如し。倏忽として轉變し、称て計うべからず〔数え切れないほど多い〕。凶書に写す所、降魔の変〔釈迦が悪魔をしりぞけた場面を描いた絵図〕等、蓋し少小のみ。畏るべきの相、復是に過ぎたり。而れども、能く安心して、湛然として空寂なりければ、逼迫の境、自然に散失す。又、父母師僧の形を作す。乍に枕し、乍に抱き、悲咽流涕す。但だ、深く実相を念い、本無に体達すれば、憂苦の相、尋で復た消滅す。強軟の二縁、動かす能わず。明星出る時、神僧現じて曰く、「敵を制し、怨に勝つ。乃ち勇と為すべし。能く斯の難を過ぐる、汝の如き者無し」と。既に安慰し已りて、復為に法を説く。説法の辞、意を以て得べく、文を以て載すべからず。当に語下に於て、句に随いて明了し、雲を披き、泉を飲む。水日喩に非ず。即便、問て曰く、「大聖是れ何の法門ぞ。当に云何んが学し、云何んが弘宣すべきや」。答う、「これを一実諦と名く。之を学ぶに、般若を以てし、之を宣るに、大悲を以てす。今より已後、若し自行人を兼ねれば、吾れ皆に影響せん」と。

この「華頂降魔」の説話と、『大江山絵詞』の酒天童子の霊木説話には、つぎのような共通点があります。

- ・ 霊山で修行する高僧の妨害をする鬼が登場する(「魍魅千群」〔たくさんの鬼や化け物〕と、酒天童子)。
- ・ 高僧が、主要な人物として登場する(最澄と、智顛)。

こうした共通点があることから、『隋天台智者大師別傳』の「華頂降魔」の説話(「霊山の鬼の説話」)は、『大江山絵詞』の酒天童子の霊木説話の、原型のひとつであったのかもしれない。

魍魎魍魎: 山や川に棲む赤い童子すがたの鬼

ちなみに、さきほどの、「華頂降魔」の説話のなかにあった、「魍魎」という言葉には、「山や川に棲息している鬼や化け物」というような意味があります(『字通』, p. 1080, p. 1500)(『角川大字典』, p. 1975, p. 1977)。「魍魎」という言葉は、「魍魎」という言葉とつなげて、「魍魎 魍魎」というひとつの言葉としてあつかわれることがしばしばあります。その「魍魎」という言葉にも、「山や川に棲息している鬼や化け物」というような意味があります。なお、「魍魎」については、そうした意味にくわえて、「山のなかの水に棲む化け物」や、「水神」といった、水に関する特徴があるとされることもあるようです(『字通』, p. 1519, p. 1520, p. 1623)(『角川大字典』, p. 1977)。

また、「魍魎」は、「赤い目で赤黒い色をした幼児の姿をしている」とされることもあるようです(『字通』, p. 1519, p. 1520, p. 1623)(『角川大字典』, p. 1977)。そうした、「赤い」、「赤黒い」、「幼児の姿」、などの「魍魎」の特徴は、酒天童子(酒呑童子)の体色が一般的に赤色だとされていることや、酒天童子(酒呑童子)が「童子」と呼ばれていることなどと、なんらかのつながりがあるのかもしれません。

青色と水神のつながり

「比叡山の鬼の霊木の説話」に登場する青鬼が「青い色をしている」のは、その鬼が水神であることの象徴ではないかとおもいます。そのように考える理由には、つぎのようなものがあります。

- ・ 霊木があった場所が、比叡山の水源地帯であること。
- ・ 弁慶水の水天童子の説話の存在。
- ・ 台密の水神である水天と青色との関係。
- ・ 『大江山絵詞』で、鬼が城の壇上積基壇に波の文様が描かれていること。
- ・ 『大江山絵詞』で、酒天童子の首の下に青い水が描かれていること。
- ・ 比叡山の周辺のほかの鬼伝説に登場する鬼も、水神としての要素を備えていること

ここからは、上記の話題について、お話していきたいとおもいます。この下の地図は、比叡山延暦寺の東塔北谷の地区のなかで、これ以降でお話する話題に関連する場所を示した地図です。



比叡山延暦寺の とうどう 東塔 北谷の地区の地図

ちなみに、「酒天童子(酒呑童子)が、水神^{すいじん}としてのさまざまな性質をもっている」ということについては、すでに、高橋昌明さんが、『酒呑童子の誕生』のなかの、「竜宮城の酒呑童子」という章や、その章のなかの「竜王(水神)たる酒呑童子」という節などで、さまざまな事例をあげて、くわしく述べておられます(高橋, 2005, pp. 125-158)。ですので、本稿では、「酒天童子(酒呑童子)が水神^{すいじん}としての性質をもっている」ということについて、高橋さんがすでに述べておられることがらには触れません。

比叡山の霊木と、大宮川の水源地帯

さきほど紹介した、「霊木に象徴される、比叡山の所有権移転の説話」が記載されている文献群を見ると、どの文献でも、霊木があったとされている場所は、だいたい、下記の2つの地区のうちどちらかだとされています。下記の2つの地区は、比叡山延暦寺の とうどう 東塔 地区のなかの、

きただに とうとうきただに
北谷 地区(東塔 北谷)を構成する地区です。

- ・ 虚空蔵尾
- ・ 八部尾

ちなみに、上記の2つの地域の名称の末尾について、「尾」という言葉は、「山の尾」(「山裾」)や、「谷」という意味であるようです(『近江輿地志略』, p. 283)。ですので、ここで言う「尾」という言葉は、「尾根」を意味しているのではないようです。

上記の2つの地区によって構成されている「東塔 北谷」の地区は、比叡山地の中央を流れる大宮川おおみやがわの、主要な水源地帯のひとつです。大宮川おおみやがわは、比叡山地でもっとも重要で、もっとも神聖視されている川です。比叡山の麓にある日吉大社ひよしだいじやも、大宮川おおみやがわの流れによりそのような位置にあり、神事の際に大宮川おおみやがわの水を利用していることから、大宮川おおみやがわの水に対する信仰がうかがえます。

ちなみに、虚空蔵尾こくぞうおは、「明星尾」や、「白狐尾」とも呼ばれます(武, 2008)。また、虚空蔵尾こくぞうおの地区の尾根は、「虚空蔵峰」と呼ばれます(『近江輿地志略』, p. 283)。

また、八部尾はちぶおの地域のなかにある、霊木があったとされている場所は、「紅葉溪」や、「仏母谷」、「仏母塚」、「香炉岳」、「天龍峰」などとも呼ばれます(武, 2008)。

比叡山の霊木の旧跡1：八部尾

現在、八部尾はちぶおの地域のなかには、「仏母塚」や、「香炉岳」、「天龍峰」などと呼ばれる場所があり、そこに霊木があったとされています。その場所には、現在、「根本中堂 薬師如来 御衣木 旧跡」という文字が刻まれた石標が立っています。これは、比叡山延暦寺の総本堂である、根本中堂こんほんちゆうどうの本尊の薬師如来像がつけられた際に、御衣木みそぎ(材木)として利用された霊木がこの場所にあった、ということを示しています。



「根本中堂 薬師如来 御衣木 旧跡」の石標
(比叡山延暦寺 東塔 北谷 八部尾 仏母塚)

比叡山のなかでも、とくに神聖な5つの水源として、「五水」と呼ばれるものがあります。その「五水」のうちの一つに、「香炉岡」の水があります(『神道大系 神社編 29』, p. 375)。この「香炉岡」というのが、どこを指すのかははっきりしないのですが、もしかすると、八部尾の地域の中にある、「香炉岳」(「仏母塚」、「天龍峰」)のことかもしれません。もしそうだとすると、八部尾の地域が、大宮川の水源地域として、神聖視されていたということを裏付ける証拠の一つになるだろうとおもいます。

ちなみに、「根本中堂 薬師如来 御衣木 旧跡」の石標がある場所のすぐそばを流れている谷川の水源の一つは、弁慶水という 閼伽井(井戸)です。その弁慶水には、水天童子という護法童子にまつわる説話が残っています。その水天童子については、後述します。

比叡山の霊木の旧跡2：虚空蔵尾

かつて、虚空蔵尾の地区（東塔北谷）にあった、根本中堂の闕伽井（井戸）の水は、阿耨達龍王が住む無熱池という池から流れ出た水であるとされて、神聖視されていました（『神道大系 論説編 4』, p. 358）。また、その根本中堂の闕伽井（井戸）の水は、比叡山のなかでもとくに神聖な5つの水源である「五水」のうちのひとつとされていました（『神道大系 神社編 29』, p. 376）。このように、虚空蔵尾の地区は、神聖な水源地帯だと考えられていたようです。

虚空蔵尾の地区のなかには、現在、霊木があったとされている場所を示す石標などはないようです。ですが、虚空蔵尾の地区は、最澄が比叡山ではじめて草庵をむすんだ聖地があったり、比叡山延暦寺の総本堂である根本中堂があったりと、比叡山延暦寺のなかでも、もっとも神聖視されている地区です。

虚空蔵尾についての記述としては、『山家要略記』（神宮文庫本）という文献のなかにも、おおよそ、つぎのようなことが記されています（『神道大系 論説編 4』, p. 107）。（この文献の成立年代は、鎌倉時代後期です（鎌倉時代は、1185年ごろ～1333年）。下記の文章のなかの、〔 〕（亀甲括弧）内の言葉は、筆者による注記です。）

根本中堂は、虚空蔵尾の中心なり。故に中堂〔根本中堂〕を、当山第一の伽藍と為す。虚空蔵尾を以て、当山第一の霊地と為す。

また、虚空蔵尾の地区のなかにある、最澄が比叡山ではじめて草庵をむすんだ場所には、「伝教大師初入山之地 虚空蔵尾本願堂旧跡」と刻まれた石碑があります。

『溪嵐拾葉集』巻第107のなかの、「記録部 私苗」の「六」の項目のところには、「根本中堂の本尊である薬師如来像の御衣木（材木）となった霊木は、今の本願堂の跡地にあった」という記述があります。このように、もしかすると、虚空蔵尾の地区にあったとされている霊木は、本願堂の跡地にあったのかもしれませんが。



「伝教大師初入山之地 虚空蔵尾 本願堂 旧跡」の石碑
(比叡山延暦寺 東塔 北谷 虚空蔵尾)

また、虚空蔵尾の地区の北の端のあたりにある、北谷墓地には、現在、メタセコイアの巨木がそびえ立っています。もしかすると、かつて、虚空蔵尾にあったという「鬼の霊木」は、このメタセコイアの巨木のように、巨大な木だったのかもしれませんが。



メタセコイアの巨木

(比叡山延暦寺 東塔 北谷 虚空蔵尾 北谷墓地)

弁慶水と水天童子

さきほど、八部尾の地域の水源のひとつである、弁慶水という 闕伽井 (井戸) があることを紹介しました。その弁慶水にまつわる起源説話のひとつに、水天童子という護法童子についての説話があります。その水天童子は、酒天童子の説話の成立にかかわりがある可能性があるとおもわれますので、ここで紹介させていただきます。

伝承では、智証大師 円珍が熊野に参詣したときに、熊野権現が円珍にたいして、水天童子という名前の護法童子(従者)をあたえた、とされています。そのあと、円珍につきしたがって比叡山に来た水天童子は、住房のちかくに井戸がないために、用水の不便さに悩んでいた円珍のために、円珍の住房のちかくで井戸を掘りあてた、とされています。そのときに、水天童子が掘りあてた井戸が、いまの弁慶水だとされています。(『神道大系 論説編 4』, pp. 214-215) (『續天台宗全書 神道 1』, pp. 61-62) (碓, 1928, pp. 42-45) (弁慶水には、起源説話が複数あるため、通称も複数あり、「千手水」や、「千寿水」、「独鈷水」などと呼ばれることもあります(武, 2008, pp. 216-217)。)

弁慶水がある場所は、比叡山延暦寺の東塔^{とうとう}地区のなかの西谷地区のなかです。弁慶水がある場所は、円珍の住房であった、山王院^{さんのういん}のすぐちかくです。ちなみに、山王院は、千手堂や、^{のちのとういん}後唐院という名称で呼ばれることもあります。



弁慶水（比叡山延暦寺^{とうとう} 東塔 西谷）

水天童子(シュイティエン童子)から、酒天童子(シュテン童子)へ

ちなみに、無理があるこじつけかもしれませんが、「酒天童子」(シュテン童子)という名称は、「水天童子」が転訛したことで生まれた名称である可能性もあるかもしれないとおもいます。

高橋昌明さんは、『酒呑童子の誕生』のなかで、酒呑童子(シュテン童子)という名称の由来についての説のひとつとして、「斉天大聖」が転訛したことで生まれた名称である可能性がある、という説を提示しておられます。下記の引用文は、そのことについて、高橋さんが、『酒呑童子の誕生』のなかで述べておられることです(高橋, 2005, pp. 98-99)。

斉天大聖の現在の中国読みは、チーティエンダーション(qí tiān dà shèng)である。これを口中で繰り返していただきたい。とくにチーティエンの部分、どこことなく酒呑に似て

いないだろうか。もちろん、齊天と酒呑の音韻の違い、近世福州音で齊天をどのように発音していたかなど問題は残るが、「失妻記」の入手者と祖本作者が同一人物である必要はないから、中国語会話に堪能でない祖本作者が翻案の時、いわば宛字の感覚で酒呑童子としたとも考えられる。古い酒呑童子の表記が、逸本をはじめいずれも酒天と天になっていることを、わが想像を支える論拠の一つとする。要するに、白猿伝説は素材面と、主人公の名乗りの両面で、酒呑童子説話に深甚な影響を与えたといいたい。

上記の高橋さんの発想を参考にさせていただきながら、大胆な空想をさせていただくことが許されるならば、「水天童子」という呼称が転訛して、「酒天童子」(シュテン童子)という呼称が生まれた、という可能性も考えられるのではないかとおもいます。

「水天」は、現在の中国語(普通話)の発音では、「シュイティエン」(shu ĭ tiān)というような発音になります。この「シュイティエン」という発音は、「酒天童子」(シュテン童子)という呼称のなかの、「シュテン」という発音と、よく似ているとおもいます。

中世の比叡山延暦寺(日本天台宗)の僧侶たちは、漢籍などに記された漢文をとおして、中国の天台宗の教えなどを学んでいました。ですので、中世の延暦寺の学僧たちは、中国語の発音についての知識も身につけていたのではないかとおもいます。そうした、比叡山延暦寺の学僧たちが、酒天童子説話(または、その原型となった説話)を創作したのだらうとおもいます。

ですので、中世の比叡山延暦寺において、弁慶水についての伝承に登場する「水天童子」(シュイティエン童子)という護法童子の呼称が転訛して、また、なんらかの理由で、その護法童子が悪鬼とされるようになり、その影響で、「酒天童子」(シュテン童子)という悪鬼と、その呼称が生まれた、という可能性も、無いとは言えないのではないかとおもいます。

また、「水天童子」という呼称から、「酒天童子」という呼称が生まれたのだと考えると、「酒天童子」という名称のなかに、なぜ「天」という文字が入っているのか?、という疑問に対する答えになるのではないかとおもいます。

なお、「護法童子であった水天童子が、悪鬼である酒天童子に変わった」ということについては、天野文雄さんが、「酒天童子」考」という論文のなかで、「護法童子が、悪鬼に変わることもあった」という事例を提示しておられます(天野, 1979, p. 22)。天野さんは、一例として、書写山円教寺を開山した性空上人や、その甥である皇慶に仕えた、二人の護法童子のうちの、乙天(乙護法)という護法童子が、邪悪な存在に変化した、という事例をあげておられます。(ちなみに、その乙天(乙護法)という護法童子は、青鬼であるとされています。)ですので、「護法童子(水天童子)が、悪鬼(酒天童子)に変わった」という可能性もあるだらうとおもいます。

ちなみに、もし、護法童子であった水天童子が、悪鬼(酒天童子)とされるようになったのだとすると、その背景には、円珍派(寺門派)と、円仁派(山門派)の、派閥争いがあったのかもしれませんが。中世の比叡山延暦寺において、その派閥争いが激化していた時期に、円仁派(山門派)に属していた学僧が、円珍派(寺門派)をおとしめるために、円珍派の宗祖である円珍の護法童子である水天童子を悪鬼に仕立て上げた、という経緯があったのかもしれませんが。そのようにして、円仁派

(山門派)の学僧が、「酒天童子」という悪鬼をつくりだして、その悪鬼が退治されるという筋書きの説話(物語)をつくったのかもしれませんが。そして、その説話が、『大江山絵詞』の説話(酒天童子説話)の成立につながったのかもしれませんが。

台密の水神たる水天

さきほど紹介した水天童子の「水天」という言葉からは、^{たいみつ}台密(天台宗の密教)の神である十二天のひとつである、「^{すいてん}水天」のことが連想されます。「^{すいてん}水天」は、もともとは、「Varuna」(ヴァルナ、バルナ、嚙嚙拏)という、古代インドの^{すいじん}水神であったものが、密教に取り入れられたものです。^{すいてん}水天は、水の神や、川の神、竜神、竜王などとされています。(佐和, 1975, pp. 422-423) (『密教大辞典 第3巻』, pp. 1321-1323)

もしかすると、さきほど紹介した「水天童子」の、「水天」という名称は、密教の十二天のひとつである、この「^{すいてん}水天」の名称からとられたものなのかもしれません。

ちなみに、十二天のひとつである^{すいてん}水天にまつわる密教の^{しゅぼう}修法である^{すいてんく}水天供(水天法)という儀式では、青色の衣や、青色の鉢など、水を象徴する青色の品々が使用されます(『密教大辞典 第3巻』, pp. 1322-1323) (『大日本仏教全書 第40巻』, pp. 2225-2226)。そのように、^{たいみつ}台密(天台宗の密教)においては、「水や、^{すいじん}水神の象徴として、青色をもちいる」という観念があったようです。それを踏まえると、「霊木に象徴される、比叡山の所有権移転の説話」に登場する「青鬼」の、「青い色をしている」という特徴が、^{すいじん}水神であることの象徴である、という可能性もあるのではないかとおもいます。



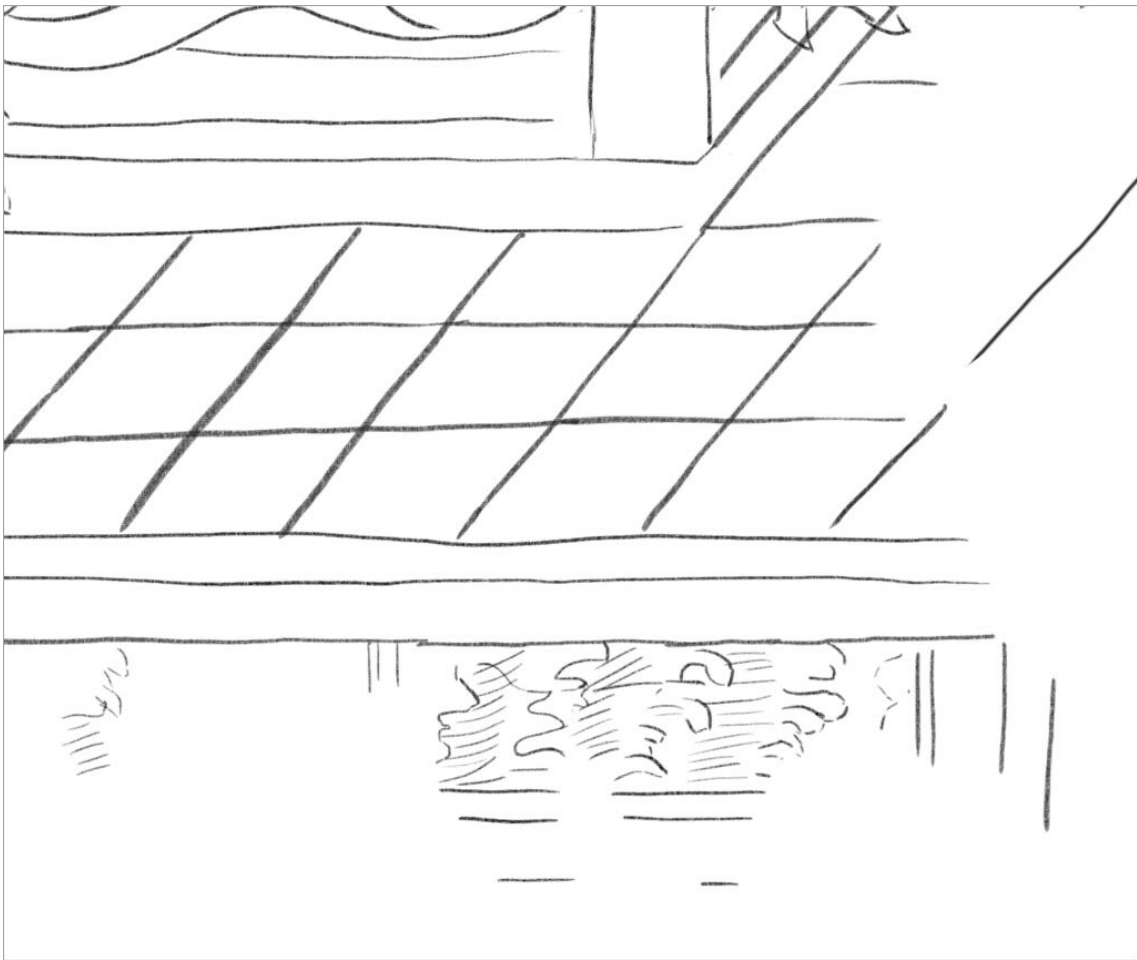
「^{すいてん}水天」の絵図(第3絵図) (『^{あきぼしやう}阿婆縛抄』より)

鬼が城の壇上積基壇に描かれた波の文様

『大江山絵詞』の絵図のなかに描かれている、酒天童子の宮殿(鬼が城)の^{だんじやうづみきだん}壇上積基壇の^{はめいし}羽目石の部分には、「波の文様」が描かれています。(『大江山絵詞』の絵巻物の絵図のなかに描かれている、酒天童子の宮殿の^{だんじやうづみきだん}壇上積基壇のすべてに、この「波の文様」が描かれています。)



『大江山絵詞』の「下巻 第七絵図」のイメージ図



壇上積基壇の羽目石に描かれている「波の文様」の部分(拡大図)
 (『大江山絵詞』の「下巻 第七絵図」のイメージ図)

『大江山絵詞』の絵巻物のなかで、複数回描かれている、壇上積基壇の部分の絵図のなかに

は、この「波の文様」の「波」の振幅がとてもこまかくて、遠目に見ると、ただの「ななめの直線」に見えてしまう絵図もあります。ですが、近づいてよく見ると、それらの「ななめの線」が、じつは、こまかく振幅している波線になっている、ということがわかります。

また、『大江山絵詞』のなかの、酒天童子の宮殿を描いた絵図のなかでも、鬼のすがたになった酒天童子が描かれている場面などのいくつかの場面では、建物の壇上積基壇の羽目石の部分に描かれている「波の文様」が、まるで荒海の白波のような、はっきりとした「波」として描かれています。

このように、酒天童子の宮殿（鬼が城）の建物のなかに、水を暗示する「波の文様」が描かれているということは、酒天童子が水神であることをあらわしているのではないかとおもいます。

酒天童子の首の下で波打つ青い水

『大江山絵詞』の絵巻物の、下巻の一番最後の絵図のなかに、源頼光たちによって討ち取られた酒天童子の首が、輿に載せられて運ばれる場面が描かれています。その絵図には、酒天童子の首が入っている四角い容器（底の浅い大きな枡のようなかたちをした容器）が、輿に載せられているようすが描かれています。その「酒天童子の首が入っている四角い容器」のなか（底のところ）は、まるで水が波打っているように見えます。

この「四角い容器のなかで波打っている水」は、酒天童子の首の切断面から流れ出た水なのかもしれません。もし、そうだとすると、酒天童子の首の切断面から出てくる液体は、赤い血液ではなく、青い水である、ということになります。このこともまた、酒天童子が水神であることを暗示しているのかもしれません。

（ちなみに、『大江山絵詞』の下巻の一番最後の絵図に描かれている、「酒天童子の首が入っている四角い容器」の絵図は、小松和彦さんの『酒吞童子の首』や、鈴木哲雄さんの『酒天童子絵巻の謎』、などの本の表表紙に掲載されています。ですので、それらの本の表表紙をご覧ください。だと、「酒天童子の首が入っている四角い容器」の絵図を見ることができます。）

おわりに

ここまで、香取本『大江山絵詞』の絵巻物に記されている、「酒天童子が変化した楠」を出発点として、それに関連する叡山開闢譚の霊木や、その守護者であった青鬼、そこからさらに、酒天童子の水神としての性質、などについて、お話してきました。この話題については、まだお話ししたいことがたくさんあるのですが、それらについてお話するには紙面が足りません。ですので、それらの話については、またのちほど、ぼくのブログに追記させていただくかたちで、おつたえできればとおもいます。（※本稿の最新版は、つぎの URL でご覧いただけます。
<https://wisdommingle.com/?p=26203>）

引用文献・参考文献

- 天野文雄 (1979) 「酒天童子」考, 『能 : 研究と評論』, 8.
- 尾崎雄二郎 [ほか] [編] (1992) 『角川大字源』, 角川書店.
- 灌頂 [撰], 上村真肇 [訳], 『隋天台智者大師別傳』, (1962), 『国訳一切経 和漢撰述 第 78 (史伝部 第 10)』, 大東出版社.
- 灌頂 [撰], 『天台山國清寺智者大師別傳第二』, 比叡山専修院附属叡山学院 [編], (1927), 『伝教大師全集 第四』, 比叡山図書刊行所. (国立国会図書館デジタルコレクション, <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1920949/116> , コマ番号 116, 2021 年 1 月 20 日閲覧.)
- 佐和隆研 [編] (1975) 『密教辞典』, 法蔵館.
- 寒川辰清 [著], 小島捨市 [校註] (1915) 『近江輿地志略 : 校定頭註』, 西濃印刷出版部.
- 白川静 (1996) 『字通』, 平凡社.
- 高橋昌明 (2005) 『酒吞童子の誕生 : もうひとつの日本文化』, 中公文庫, 中央公論新社.
- 武覚超 (2008) 『比叡山諸堂史の研究』, 法蔵館.
- 曇照 [註], 『智者大師別傳註』, (1987), 『新纂大日本統蔵経 第 77 卷』, 国書刊行会.
- 裕慈弘 (1928) 『伝説の比叡山』, 近江屋書店. (国立国会図書館デジタルコレクション, <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1175796/30> , コマ番号 30, 2021 年 1 月 20 日閲覧.)
- 牧野和夫 (1990) 「叡山における諸領域の交点・酒吞童子譚 : 中世聖徳太子伝の裾野」, 『国語と国文学』, 67(11).
- 密教辞典編纂会 [編] (1969) 『密教大辞典 第 3 卷 (シハータ) 改訂増補版』, 法蔵館.
- 『阿婆縛抄』, 仏書刊行会 [編], (1914), 『大日本仏教全書 第 40 卷 阿婆縛抄 第 6』, 仏書刊行会. (国立国会図書館デジタルコレクション , <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/952720/132> , コマ番号 132, 2021 年 1 月 20 日閲覧.)
- 『山家要略記』(華蔵院本), 神道大系編纂会 [編], (1993), 『神道大系 論説編 4』, 神道大系編纂会.
- 『山家要略記』(神宮文庫本), 神道大系編纂会 [編], (1993), 『神道大系 論説編 4』, 神道大系編纂会.
- 『山家要略記』(仙岳院本), 神道大系編纂会 [編], (1993), 『神道大系 論説編 4』, 神道大系編纂会.
- 『山家要略記』, 天台宗典編纂所 [編], (1999), 『續天台宗全書 神道 1 (山王神道 1)』, 春秋社.
- 醍醐寺蔵『聖徳太子伝記』, 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫 [編], (2005), 『中世聖徳太子伝集成 第 2 卷 真名本(下) (斯道文庫古典叢刊 ; 6)』, 勉誠出版
- 『日吉山王利生記』, 神道大系編纂会 [編], (1983), 『神道大系 神社編 29 : 日吉』, 神道大

系編纂会.

- 『日吉山王利生記』, 埴保己一 [編], 続群書類従完成会 [校], (1983), 『続群書類従 第2輯 下3版: 神祇部』, 続群書類従完成会.
- 『日吉山王利生記』, 藤田徳太郎 [ほか] [編], (1936), 『日本精神文化大系 第4巻』, 金星堂.
- 『日吉社神道秘密記』, 神道大系編纂会 [編], (1983), 『神道大系 神社編 29: 日吉』, 神道大系編纂会.
- 『法華経鷲林拾葉鈔(24巻之内自巻15至巻24)』, 鈴木学術財団 [編], (1974), 『日本大蔵経 第26巻(経蔵部 法華部章疏 6, 密経部章疏 1) 増補改訂』, 鈴木学術財団.
- 「比叡山延暦寺の東塔北谷の地区の地図」の出典: 国土地理院「地理院地図」, 地理院タイル(全国最新写真(シームレス))を加工・編集して使用しています, 地理院タイル一覧ページ:
<https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html> .